

NHK技研公開2017が

71回を数えたNHK放送技術研究所(技研)の「技研公開」。テーマは「2020年へ、その先へ、広がる放送技術」で、「2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催時に実用を目指す技術開発と、その先を目指した研究開発の成果」(黒田徹技研所長)を30項目で展示した。一般公開は5月25日～28日の4日間で、約2万人が来場した。そこで本誌編集長の渡辺元、編集部員の吉井勇、古山智恵が座談で振り返った。(構成:吉井勇・本誌編集部)



2万人以上が訪問し、子ども連れも楽しんだ技研公開

AI技術の源流に 技研の研究者がいた

吉井 編集部は技研公開の取材者であり、熱心な参加者でもありますね。

渡辺 毎年、見学して展示内容を注目しています。

古山 「技術音痴」なので理解できないこともたくさんありますが、視覚や聴覚に障害のある方と一緒にまわりながら、すべての人に伝えるための補完的放送の技術開発に関心を持っています。

吉井 プレスプレビューから基調講演、研究発表、シンポジウムのほとんどを聞いたので5日間も通い詰めました(笑)。では、展示の印象から始めましょうか。

渡辺 3つのキーワードがあったと思います。まず、フルスペック8Kが収録、制作、伝送、受信までの一連を示したこと。2つ目はAIによるプロダクションという新しいコンセプト展開、3つ目はこれまでの「テレビがファースト、スマホをセカンド」というとらえ方から、事実上「テレビをセカンド」としたことが印象的でした。

古山 編集長が指摘したスマホ連携の展示ですが、民放の興味深い取り組みがありました。その一つですが、テレビ視聴と店舗への動線を繋ぐポイントのサービスイメージを展示したTBSの提案などは実用性があると思いました。AI分野では、リアルタイム競技データから日本語の文章を自動で生成して合成音声で読み上げる生放送対応の技術も素晴らしいと思いました。

吉井 AI技術提案から一つのことへ気づきました。音声の文字変換とか、それ